

令和6年度学校評価表

評価計画					自己評価				学校関係者評価	改善計画	
中期経営目標	重点項目	達成のための方策	評価指標	目標値%	アンケート				結果と課題の説明	コメント	改善策
					教職員	生徒	保護者等	評価			
1 安心して自分の思いを表現できる集団づくり	積極的な生徒指導の推進	生徒指導の3機能(自己決定の場を与える、自己存在感を与える、共感的人間関係を育成する)を意識した授業や学年・学級経営を行う。	生徒一人一人が主体的に活動し、お互いの考えを認め合える場所づくりが行われていると考える割合	85	100	83	67	B	概ね肯定的な回答が多かったが(教職員・生徒)、教職員と生徒との捉え方に差異があり、今後どう理めていくかが課題となっている。特に、1・2年生の肯定的な意見をあげられるようにしたい。また、保護者に対し、取組の様子をさらに伝えていく必要がある。	自己決定の場は非常に大切。自分で決めることの大切さを学校だけでなく、家庭でも大切にしてほしい。	・学年集会や行事を活用し、自己決定の時間を作る。 ・生徒会、委員会での活動に取り組む生徒の姿を認め、称賛する(ホームページや学級通信を活用しながら)。
	道徳教育の充実	生徒が自分のこととして捉えたり、自他のことを考えたりできる道徳の授業づくりを行う。	自分のこととして捉えたり、自他のことを考えたりできた割合	85	85	89	69	A	概ね肯定的な回答が多かったが(教職員・生徒)、取組について保護者に示すことについてはまだまだ課題がある。	保護者への伝えも大事である。 失敗できないと考え、ハードルが高くなっている。「失敗してもいい」と大人の考えをアップデートできるような講演を聞くのも良いかも。	・授業の感想や写真を学級通信等に掲載する。 ・人権同和教育の講演会が道徳教育の一環であることを示す。 ・道徳の授業内容を自分のこととして捉えることは概ねできているので、そこから自己を振り返り、日常生活に生かすための手だてを考える(ワークシートの見直しなど)。
	協働的な学びの推進	単元や題材の内容に応じ、グループやペアで意見を出し合いながら取り組む活動を設定する。	グループワークやペア学習を通して、自分の考えが深まったと感じる生徒の割合	85	90	83	60	B	概ね肯定的な回答が多かった(教職員・生徒)。グループワークやペア学習を行っているが、相手の考えをしっかりと聴き、そこから自分の考えをもつこと、そして深めることが課題である。	家庭も悩んでいるはずで、地域が支える形になっていけば。	・朝礼などのスピーチ活動で、聴く態度を磨く。 ・さまざまな意見が出やすくなるように、発問の仕方を工夫する。 ・グループワークの仕方(意見をもつための時間の確保、意見を出しやすいグループ編成)の工夫 ・グループ活動後に出た生徒の感想を学級通信等に掲載する。
4	授業の質の向上	見通しと振り返りを大切にした学習過程の工夫	見通しと振り返りを大切にした学習過程を実施したと答える教員の割合	100	91			B	授業改善の柱であり、教員は各々がけた取組ができた。日々の取組が定着し、生徒は授業に見通しをもって臨み、理解が進んだ。	自学ノートありきで家庭学習を進めていたため、なくなったことでどうしたらよいかわからない状態。 子どもが達成感を味わえるような仕掛けが必要。家庭の力が必要。 必要性を感じさせるために、異学年で家庭学習のやり方を共有する時間があったもよいのでは。	・研修の機会をもって情報交換できるようにする ・「授業の目的を理解して活動し、自己の学びを実感している生徒の割合」の項目は保護者に聞かれても、保護者は分からないのではないかと、来年は、この項目を保護者から削除するか、残すなら保護者に通信等で伝達する。
			授業の目的を理解して活動し、自己の学びを実感している生徒の割合	80		80	43	B			
5	「その教科が好きと言える」授業づくり	生徒一人一人の家庭学習の習慣化	授業と直結した家庭学習課題の提示を行った教員の割合	70	71			A	昨年度まで取り組んだ家庭学習ノートのかわりになるように各教科から宿題を出した。しかし、実際に家で取り組む生徒は少なかった。		次の①～③のどれかに取り組む。 ①引き続き十分な宿題量を提示するとともに学年部より週末課題をだし、確実に宿題に取り組む習慣をつくる。 ②家庭学習用の5教科のワークを購入し、自学ノートの代わりに取り組ませる。 ③新学習ノート(曜日ごとに1教科指示)+週末課題に取り組む。 ・生徒が主体的に課題学習をするような取り組みをする。 ・家庭で指導してもらうように働きかける。
			家庭学習経過確認シートで各学年の学年目標時間を達成している生徒数の割合	50		35	19	C			
6	ICTを活用した学習活動の推進	各教科でのICTの活用(大型提示装置・タブレット・タブレットドリルを含む)	ICT(大型提示装置・タブレット等)を活用した授業をしていると答える教員の割合	75	82			A	タブレット端末を授業や家庭学習で使用することが定着している。来年度の教科書改訂に合わせて、より活用できるような機会を増やす。		・ICTを使用しての考えの共有や練り上げなどの課題の提示を一層行う。 ・来年度はもっと基準を上げるべきか。
			授業で生徒がICTを活用していると答える生徒・保護者の割合	75		75	56	B			

令和6年度学校評価表

	評価計画					自己評価				学校関係者評価	改善計画	
	中期経営目標	重点項目	達成のための方策	評価指標	目標値%	アンケート				結果と課題の説明	コメント	改善策
						教職員	生徒	保護者等	評価			
7	「生徒の心に火をともし」教育の推進	縦割り活動を生かした活動の推進	生徒会を中心とした縦割り活動の企画と実施	縦割り活動に意欲的に参加できたと考える生徒の割合	80	92	83	50	A	生徒会が毎回ねらいをもって異学年交流の取組を行った。教職員、生徒の肯定的評価は高い。今後はその様子等を保護者に意識的に伝える手立てが必要だと考える。	子ども達がかんばったことを褒めてあげられるように。キャリアパスポートこそ、保護者を知って置いてもらう必要がある。キャリアパスポートを使って面談することは良い取組である。	生徒の実態も踏まえ、全校生徒が意欲的に参加できる異学年交流の取組を企画・運営するとともに、学年通信や学級通信・生徒会通信等で保護者に発信していく。
8		体験的な学びの場の設定	総合的な学習の時間などにおける地域やふるさとに関わる体験的な学習の実施	総合的な学習の時間などにおける地域やふるさとに関わる体験的な学習の実施をとおして学びが深まったと考える割合	70	100	74	48	A	体験的な学習の実施について、教職員の意識の高さがうかがえる一方で、生徒との受け止めに差が見られる。生徒が学びが深まったと実感できるような工夫が必要だと考える。	体験の事前・事後指導を充実させる。体験をとおして何を学ぶのかを意識させたり、学んだことをプレゼンとしてまとめて発信したりなど、自分の成長が実感できるような活動を実施する。	
9		キャリアパスポートを生かした目標設定と振り返りの充実	育てたい力の設定 振り返りの充実	キャリアパスポートの取組で自分の目標設定や振り返りがしっかりできた割合	80	84	82	46	B	キャリアパスポートの項目や文言を見直したことで、ねらいがより明確になり、目標設定や振り返りがしやすくなった。また、保護者がキャリアパスポートを見たリコメントをもらったりする機会を増やした。	引き続き、実態に応じて必要があれば項目や文言を検討していくとともに、キャリアパスポートを使って面談（生徒・保護者）を行うなど、活用方法を工夫していく。	
10	「地域と共にあゆむ」学校づくり	地域と協同した地域での活動の場づくり	まちづくりセンターやPTA等と連携した活動の場の設定	地域の活動（行事）に参加したり、地域の人と関わったりした生徒の割合	50	88	46	27	B	いわみっ子まつりには生活科学部と美術部が主体的に企画の立案・運営に携わった。放課後あそび隊は募集をWeb申込に変更したためか、例年の4割程度の参加にとどまった。	参加率も大切だが、参加している子ども達の満足度を大切にしてほしい。大人が思う望ましい姿の押し付けにならないように。	チラシの配付やすぐーも活用して生徒、保護者に呼びかけたが、参加するにはつながっていないので、活動の実態を広く周知していく。また、学校外の地域活動（行事）をまちづくりセンターと連携して一層周知する。
11			生徒主体とした地域課題の把握と解決に向けた取組の推進	地域や社会をよりよくしようと考える生徒の割合	50	68	53	26	B	職場体験学習や職場訪問等で地域の仕事や課題について知ることができた。しかし、解決のための取組につなげることが十分にはできなかった。	課題を自分事として捉えるための仕掛けをしていく。発表や評価の場を設定することで実感のあるものとする。また、家庭でも地域のことが話題になるよう発信や生徒への意識づけを行う。	
12		学校だよりやホームページ、連絡アプリを生かした情報発信	学校便りや学年便りの定期的な発行 HPやすぐーでの情報発信 学校行事等でのオンライン配信の実施	学校の活動内容や様子が分かったり、適切な時期に情報が得られたと考える割合	90	96	75	59	B	HPやすぐーで保護者や地域に発信したり、体育祭のオンライン配信を行ったりした。学校だよりは地域への配布や民生児童委員へのすぐー配信を行った。	関心をもつような紙面づくりや内容を工夫する。学校の実態を発信することで、保護者や地域の協力を求めている。	
13	小中連携教育の推進	一中校区小中連携教育の取組を推進する。（学力向上部会、生活習慣部会、ふるさと教育部会、交流部会）	一中校区の小中学校が連携して活動できたと考える割合	70	80	28	43	C	一中、松原小、石見小、三階小の4校で取組を共有しながら実態に応じた活動を行った。交流活動では、中学生は上級生としての自覚をもつ良い機会となった。あそび隊に不参加を理由に、生徒の数値が低いと考えられる。	実際には交流活動を行っているが、数値に結び付いていない。より具体的な活動を考え、活動が実感できるものにしていく。		

※職員、生徒、保護者の各数値は、肯定的評価の割合。黄色は目標値の80%を下回ったものであり、桃色は60%を下回ったもの。